

イスタンブルにおける歴史地震と文書史料

—TSMA D.9567 の成立を巡る一考察—

澤 井 一 彰

【要 旨】

トルコ共和国は、日本と同様に地震多発国として知られる。その最大の都市であり、オスマン朝期（c.1300-1922年）には都として栄えたイスタンブルもまた、巨大なものだけでも1509年、1648年、1719年、1766年そして1894年と5度にわたって地震が発生し、そのたびに甚大な被害を受けてきた。

かつて、オスマン朝の宮廷が置かれていたイスタンブルのトプカプ宮殿に付属する文書館には、ひとつの史料が伝世している。D.9567の分類番号をもつ同史料は、ある巨大地震の後に、被災した多くの建築物を修復、再建するために行われた調査の記録である。

近年、公刊されたイスタンブルの災害史料集において、このD.9567はスレイマン1世時代（1520-1566年）の文書として紹介された。しかしD.9567には、スレイマン1世期以降に建設された複数の建物の罹災記録が残されており、また先行研究では、1648年の大地震による史料とする主張と、1766年の大地震によるものとする見解とが対立している。

本稿は、D.9567の全文を翻訳して紹介するとともに、それが作成された経緯について、先行研究で示されてきた史料的根拠を再検証する。さらに、別系統の史料も用いながら、D.9567が上記のいずれでもない、1719年の大地震によって作成されたものである可能性がきわめて高い、という新たな仮説を提示するものである。

【目 次】

はじめに

1. 主要な歴史地震と1556年のイスタンブル地震
2. TSMA D.9567の全容（翻訳と註釈）
3. TSMA D.9567の成立を巡る一考察

おわりに

はじめに

周知のように、2019年末から確認されはじめた新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、まったく止まることを知らず、日本は現在も「第5波」のただ中にある。個人的にも2020年3月中旬にトルコから慌ただしく帰国して以降、1年半が経過しようとしているにもかかわらず、イスタンブールにある大統領府オスマン文書館 (Cumhurbaşkanlığı Osmanlı Arşivi) を再訪することはもとより、日本を出国することすら果たせていない。

このような中、オスマン朝の災害史料についての論文を求められたものの、現地を訪れての史料収集なくして執筆を行うことには、大きな困難が予想された。そこで窮余の策として、2018年にトルコ共和国内務省の災害・緊急事態管理局 (T.C.İçişler Bakanlığı, Afet ve Acil Durum Yönetim Başkanlığı: AFAD) から公刊され、ウェブ上でも閲覧可能な『オスマン朝文書史料におけるイスタンブールの諸災害』に収録された史料を紹介して、その責めを塞ぐことを試みようとしたのである¹⁾。

ところが、同書で紹介された最初の史料であるTSMA D.9567を目にしたとき、非常に大きな違和感を抱かざるを得なかった²⁾。(Ürekli 2018)において、D.9567は、わずか1ページだけの文書として掲載されており、しかも史料上に日付は記されていなかった。にもかかわらず、アラビア文字によるトルコ語 (オスマン・トルコ語) で書かれた史料のファクシミリと、そのラテン・アルファベット転写との間に置かれた簡単な紹介文には、「スレイマン1世時代」(Kanuni Dönemi) と明記されていたのである (Ürekli 2018: 2)。

スレイマン1世 (Süleyman I: d.1566年) は、その治世に法 (カーヌーンkanun) の整備がなされたことからトルコにおいては「立法者」(カーヌーニー Kanuni) という綽名で知られる一方、ヨーロッパ諸国では「壮麗者」(il magnifico/the magnificent) とも称された著名な君主である。その在位期間は、1520年から1566年までの半世紀近くに及んだ³⁾。

他方で、16世紀のイスタンブールにおける最大の地震は、スレイマン1世の祖父であるバヤズィト2世 (Bayezid II: d.1512年) の治世末期にあたる1509年に発生し、同時代史料によって「この世の終わり」あるいは「小終末」(Kıyamet-i Süğra) と呼ばれた巨大地震であった⁴⁾。そして、その約10年後に始まるスレイマン1世の長い治世においては、中小規模の地震はともかく、イスタンブールにおいて巨大な地震が引き起こされたという事実は、管見の限り、確認することができない。

本稿においては、このD.9567に記された内容について先行研究の成果も踏まえつつ紹介する

-
- 1) Fatma Ürekli, Raşit Gündoğdu, Ebul Faruk Önal (eds.), *Osmanlı Arşiv Belgelerinde İstanbul'da Afetler*, Ankara, 2018.
 - 2) TSMA D.9567のTSMAとは、トプカプ宮殿博物館文書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi) の省略記号であり、D.は台帳 (defter) を意味する略号である。またTSMAには、D.以外にもE.という略号による分類も存在し、これは「紙葉」(evrak) を意味する。なお本稿で用いる一次史料の大多数は同文書館に収蔵されているものであるため、以下においては、冒頭の記号TSMAは、先行研究の記述を直接引用する場合を除いて省略する。
 - 3) アンドレ・クロー (濱田正美訳) 『スレイマン大帝とその時代』法政大学出版局、1992年。
 - 4) 澤井一彰「1509年のイスタンブール大地震とその後の復興—「この世の終わり」と呼ばれた大震災—」『歴史学研究』no.898, pp.154-162, 2012年、Kazuaki Sawai, “The Great Istanbul Earthquake of 1509 and Subsequent Recovery,” *Mediterranean World*, no.22, pp.29-42, 2015.

とともに、同史料がイスタンブルのいずれの地震を受けて作成されたのかという問題についても、いくつかの角度から考察する。そして、対立する複数の主張や論点を整理した上で、まったく新たな仮説を提示することを目指したい。

1. 主要な歴史地震と1556年のイスタンブル地震

イスタンブルが位置するトルコ共和国は、日本と並ぶ世界有数の地震大国として知られる。その国土の97%を占めるアナトリア（小アジア）は、ユーラシア・プレート、アラビア・プレート、エーゲ海・プレートおよびアフリカ・プレートに四方を取り囲まれたアナトリア・プレートの上に位置しており、アナトリア北部を東西に横断する北アナトリア断層をはじめとする活発な断層が存在している。この断層にかかわる地震としては、1999年8月に発生しイスタンブルを含めて1万7000人以上の犠牲者を出した巨大地震や、余震に巻き込まれて日本人ボランティアが死亡した2011年10月のトルコ東部地震が挙げられよう。

トルコ共和国が成立する以前のオスマン朝期（c.1300-1922年）にも、この地域は、たびたび大きな地震の被害を受けてきた。なかでもイスタンブルは、15世紀後半以降にオスマン朝の都とされたこともあって、他の都市と比較しても多くの情報を得ることができる。例えば、オスマン朝治下のイスタンブルにおいては、大規模なものだけでも前述の1509年のほか1648年、1719年、1766年および1894年にそれぞれ大地震の発生を確認することができる。また、これら以外にも記録に残されている中小規模の地震については枚挙に暇がない。

一方で、先に紹介した（Ürekli 2018）に掲載されたD.95677についての紹介文にある「スレイマン1世時代」（1520-1566年）には、すでに述べたように、これまで大きな地震は発生しなかったと考えられてきた。その規模はともかく、ほとんど唯一ともいい得る例外は、治世後半の1556年5月11日に起きたとされる地震である⁵⁾。これについては、ハプスブルク家の使節としてオスマン朝に派遣されたことで著名なビュスベク（Ogier Ghiselin de Busbecq; d.1592）が、自らも睡眠中に飛び起きたという体験談とともに、モスクとして使用されていたアヤ・ソフィアにもひび割れの被害が生じたなどの具体的な情報を伝えている⁶⁾。また、オスマン朝による毎年のようなヨーロッパ侵攻に怯えていたキリスト教諸国では、例えば南ドイツのニュルンベルクにおいて瓦版が発行されるなど、この地震の発生が大きく報じられた。さらに、点数は少ないものの、オスマン朝の年代記にも記述が確認できるという⁷⁾。

5) ヨーロッパ人の記録では、地震発生日が5月10日とされているものもある（N.N.Ambraseys, C.F.Finkel, *The Seismicity of Turkey and Adjacent Areas: A Historical Review, 1500-1800*, İstanbul, 1995, p.50.）。あるいは、地震発生日が夜明け前（buh-ı sadık）であったために、ある記録者は前日10日の夜の出来事と認識した一方で、日没を一日の始まりとする伝統的慣習に基づく別の者は、翌5月11日のものとして理解した可能性もある。

6) Ogier Ghiselin de Busbecq, *The Four Epistles of A.G.Busbecq*, Graz, 1968, p.144.

7) 「ヒジュラ暦963年ラジャブ月1日（1556年5月11日）の夜明け前に巨大な地震が起こり、多くのミナレット（モスクの尖塔minare）や城の壁、多数の家々や炉が倒壊し、スルタン・メフメト（2世）のモスクは修復がなされた」。TSMK（トプカプ宮殿博物館図書館Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi）R.1100, 105葉b（Mustafa Cezar, “Osmanlı Devrinde İstanbul Yapılarında Tahribat Yapan Yangınlar ve Tabii Afetler,” *Türk Sanatı Tarihi Araştırma ve İncelemeleri*, no.1, 1963, p.184.）同史料は執筆後未見であるが、これを引用したオルハン・サーキンは、年代記『オスマ

ともあれ1556年のイスタンブル地震は、例えば前述の1509年や1766年の大地震と比較すると相対的に規模の小さなものであった可能性がきわめて高い。おそらくは、そのため現在に至るまでこの地震についての専論は著されておらず、オスマン朝において執筆された様々な年代記における記述の少なさも、こうした事実を反映しているように思われる。

いずれにせよ、本稿で検討の対象とするD.9567が、1556年の地震を受けて記されたものではなく、同時に「スレイマン1世時代」の史料でもないことは断言することができる。なぜなら(Ürekli 2018)では、わずか一葉のみの文書であるかのように紹介されていた同史料には、実は続きが存在し、そこには地震が発生した1556年はもとより、その10年後のスレイマン1世の薨去によって終わった治世から数えて、数十年後に建設されたはずの複数の建築物についての罹災記録が確認できるためである⁸⁾。

(Ürekli 2018)が、なぜD.9567の最初の一葉のみを、何らの説明もなく切り取って紹介するようなことを行ったのか、またその成立年代を「スレイマン1世時代」と断定し得たのかは、全く不明である。それでは、D.9567は、いつ、どのような目的で作成された史料なのだろうか。以下においては、まずD.9567の全体を翻訳してその内容を確認した後に、同文書がどの地震を受けて作成されたのかという問題についても詳細に検討していきたい。

2. TSMA D.9567の全容 (翻訳と註釈)

オスマン朝において作成された文書史料の大多数は、イスタンブルにある大統領府オスマン文書館に収蔵されている。現在も分類や修復が継続されている史料の総数は1億5000万点を超えるとされ、その中心は大宰相府や財務長官府といったオスマン朝の官僚機構が作成した膨大な文書群から構成される。一方、同じくイスタンブルにあり、共和国期以降には博物館とされたトプカプ宮殿にも図書館と文書館とが附置されており、近年まで長らく、同宮殿に伝世した史料の保存と閲覧が行われてきた⁹⁾。

トプカプ宮殿博物館文書館に収蔵されるD.9567は、同宮殿に伝わった台帳のひとつである。大統領府オスマン文書館に大量に保管され、多くの場合、オスマン朝の官僚機構が相互に参照するために作成した難解な書体による文書群とは異なり、おそらくは君主自身、あるいは大宰相などの限られた政府高官に対して、何らかの事実を簡潔に知らせるために、明瞭な書体と丁寧な筆致によって作成された史料であるという印象を受ける。

具体的には、D.9567は地震によって損傷した複数の建物群についての報告書である。やや長くはなるが、先行研究を踏まえつつ以下に史料の全文を翻訳し、必ずしもオスマン朝史の専門家ではない読者の理解を助けるための註を付しつつ紹介していきたい¹⁰⁾。

ン王家の歴史』(*Tarih-i Al-i Osman*) であるとする。Orhan Sakin, *Tarihsel Kaynaklara Göre İstanbul Depremleri*, İstanbul, 2002, p.32.

8) 例えば、1591年落成のカユシュ・ムスタファ・アー学院 (Kayış Mustafa Ağa Medresesi) や、1595/96年完成のハーフズ・アフメト・パシャ・モスク (Hafız Ahmed Paşa Camii)。

9) ただし現在、トプカプ宮殿博物館文書館に所蔵される史料は、上述の大統領府オスマン文書館内に設置された端末から閲覧することになっており、史料の実物に触れることはできない。

10) 後で詳述するように、D.9567は(Ürekli 2018)以前にも、いくつかの研究によって利用されてきた。とりわけ、(Cezar 1963)においては史料全体がラテン・アルファベットによって転載されており、

【史料翻訳】

故ガーズイー（gazi聖戦士）・アティーク・アリ・パシャ（Atik Ali Paşa: d.1511年）¹¹⁾ のワクフである聖なるモスク、すなわちディキリタシ（Dikilitaş）¹²⁾ の側にある大モスク¹³⁾ と、カラギュムルク（Karagümrük）¹⁴⁾ の近くにある中規模モスク¹⁵⁾、およびエディルネ・カプ門（Edirnekapısı）¹⁶⁾ の内側に存在する小さなモスク¹⁷⁾ において、このたび発生した地震で損傷した箇所について述べる。

ディキリタシの近くにある、聖なるモスクの中ほどの大ドームは完全に崩壊し、またそのミナレットはバルコニー（şerefe）¹⁸⁾ に至るまで破壊され、聖なる学校（mektepe）のいくつかの場所も壊れて、いくつかの箇所は修復が必要である。

前述の者のワクフの、すでに言及されたカラギュムルクの近くに存在する中規模モスクは、その敷地内の中庭にある3つのレンガのアーチが完全に崩壊し、またそのミナレットは、バルコニーに至るまで完全に崩落したのである。

前述の者のワクフであり、これもエディルネ・カプ門の内側にある小さなモスクにあるミナレットと聖なるモスクのいくつかの箇所は、修理と修復の必要がある。

スイリヴリ・カプ門（Silivrikapısı）¹⁹⁾ の内側にある、故イブラヒム・パシャ（İbrahim Paşa:

本稿でも参照した（Cezar 1963: 385-388）。

- 11) ボスニア出身の白人宦官。バヤズィト2世期の1501年に最初の、1506年には2度目の大宰相となるものの、1511年に遠征先において戦死した。Mehmet İpşirli, "Atik Ali Paşa," *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi* (以下、*DİA*と略記), vol.4, 1991, pp.64f.
- 12) 直訳すると「突き立てられた石」を意味するディキリタシは、コンスタンティノポリス（コンスタンティノープル）の由来でもあるローマ皇帝コンスタンティヌス1世（Constantinus I: d.337年）による記念柱であった。オスマン朝期には、鉄製の箍（çember）によって補強されたため、現在はチェムベリルタシ（箍付の石柱Çemberlitaş）の名で呼ばれる。Semavi Eyice, "Çemberlitaş," *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi* (以下、*DBİA*と略記), vol.2, 1994, pp.482f.
- 13) アティーク・アリ・パシャによって建設されたモスク。1894年のイスタンブル大地震後の修復による碑文には、ヒジュラ暦902（1496/97）年の建造と記されている。一方、オスマン建築史の大家であったエイジェは、モスクの規模やワクフ文書の作成年代からヒジュラ歴915（1509）年に建設されたとする。Semavi Eyice, "Atik Ali Paşa Camii," *DİA*, vol.4, 1991, pp.65-67.
- 14) 「陸の税関」を意味するカラギュムリュクは、大城壁の北端に近いエディルネ・カプ門のすぐ内側にある街区の名称である。İlber Ortaylı, "Karagümrük," *DBİA*, vol.4, 1994, pp.452f.
- 15) 前述のアティーク・アリ・パシャ・モスクと区別するため「中くらいの」（vasat）という語を付して、ヴァサト・アティーク・アリ・パシャ・モスクと呼ばれる。同モスクは、建設者の死後、1512年頃に完成した。Semavi Eyice, "Atik Ali Paşa Camii," *DİA*, vol.4, 1991, p.67.
- 16) トラキア地方にあり、イスタンブルの北西約230kmに位置する副都エディルネ（Edirneハドリアノポリス）に向かう道筋に設けられた大城壁の門であるため、この名で呼ばれる。
- 17) ビザンツ期の美しいモザイク画で知られ、現在は博物館であるカーリエ・モスク（Kariye Camii）を指す。元来は、コーラ（Kholā）修道院の一部だったが、バヤズィト2世期にアティーク・アリ・パシャによってモスクとされた。澤井一彰、「イスタンブルの「イスラーム化」と「教会」のモスクへの転用—モスク転用の時期の分析を中心に—」『ヨーロッパ文化史研究』第20号、2019年、pp.51f.
- 18) ミナレットは、ムスリムの義務のひとつである礼拝を呼びかけるための施設である。オスマン朝期のモスクに付属するミナレットの多くは、内部が階段となっており、そこからバルコニーに出て一日5回のアザーン（azan礼拝の呼びかけ）が、肉声で唱えられていた。
- 19) イスタンブルの西方約70kmに位置するスイリヴリ（Silivri）に向かう街道（エグナティア街道 Via Egnatia）につながる大城壁の門があることから、この名が付けられた。

d.1563年)の聖なるモスク²⁰⁾が、発生した地震によって破壊され、また修復が必要な箇所について述べる。

聖なるモスクの大ドームは修復の必要があり、またそのミナレットは、聖なるモスクの壁に至るまで取り壊されることが必要。

また、聖なるモスクの近くにある学校の中柱 (orta ayak) が新たに (造り直され)、また周囲のレンガの壁と天井は、修理と修復が必要である。

前述の者のワクフで、エセ・カプ門 (Esekapısı)²¹⁾にある聖なるモスク²²⁾のミナレットは新築されることが必要であり、また周囲のレンガの壁は、修理と修復が必要である。

前述の者のワクフで、これもエセ・カプ門 (にある)、聖なるモスクの敷地内にあるイスラーム学院 (medrese) の各房 (hüccerat) の炉 (ocak) のうち、8基のレンガ造りの炉が完全に壊れたことから、新造されることが必要である。

これもまた、前述の者のワクフで、エセ・カプ門の付近にあり、カスム・アーの泉亭 (Kasım Ağa Çeşmesi)²³⁾の周辺にある、諸学校のいくつかの箇所の修理と修復が必要。

故ガーズイー・ダウト・パシャ (Davut Paşa: d.1498年) の、イスタンブルにある聖なるモスク²⁴⁾。前述のモスクとイスラーム学院、および帝室救貧施設 (imaret-i amire) における地震によって損傷した箇所について述べる。

聖なるモスクにおける、ミフラブ (mihrab壁龕)²⁵⁾がある場所のドームと壁は、新築されることが必要。

前述の、聖なるモスクの大ドームと、周囲の壁および複数の (小) ドームと漆喰は、修理と修復が必要。

(建物の) 外部のドームとアーチは修理が必要。

また、そのミナレットは修理が必要²⁶⁾。

また、そのイスラーム学院の、講堂の場所と2つの部屋は新たに修復が必要。

また、14の部屋は修理が必要。

また、前述のイスラーム学院の庭園の壁は、新たに修復が必要。

20) ボスニアに生まれ、デヴシルメの後に宦官 (ハドゥム hadım) とされて、スレイマン1世期には白人宦官長 (Babüssaade Ağası) から第4宰相にまで登り詰めたハドゥム・イブラヒム・パシャによって1551年に建設されたモスク。Semavi Eyice, "İbrahim Paşa Külliyesi," *DİA*, vol.21, 2000, pp.341-343.

21) 正しくはイーサー・カプ門 (İsa Kapısı 「イエスの門」) であったが、地元住民の訛りによって次第に「エセ・カプ門」と呼ばれるようになった。1509年の大地震によって倒壊したと記録されるが (澤井2012: 158)、遺構は残され、その後も街区の名としては長らく用いられた。

22) エセ・カプ門の遺構近くにある、エセ・カプ・モスク。ビザンツ期の教会跡が、前述のハドゥム・イブラヒム・パシャによって1560年頃にモスクとされた。Semavi Eyice, "Esekapısı Mescidi ve Medresesi," *DİA*, vol.11, 1995, pp.371f.

23) この泉亭は現存していないと考えられ、残念ながら、その詳細については一切不明である。

24) アルバニア系の人物で、バヤズィト2世期の1483年から14年以上にわたって大宰相を務めたコジャ・ダウト・パシャ (Koca Davud Paşa) によって1485年に建設されたモスク。Semavi Eyice, "Davud Paşa Külliyesi," *DİA*, 1994, vol.9, pp.42-44.

25) モスクや礼拝所において、礼拝する方向となるメッカにあるカアバ神殿の方角を示す壁龕。

26) 後の議論において重要となるこの一文は (Cezar 1963) においては欠落している。

前述の者のワクフである学校についても、修理が必要。

また、ワクフ管財人 (mütevelli) の部屋と帝室救貧施設、および食堂 (mekelhane) は、修理が必要である²⁷⁾。

スルタン・メフメト・ハンの聖なるモスク²⁸⁾ の側にある、ミマール・スイナン街区の故ハーフズ・アフメト・パシャ (Hafız Ahmed Paşa: d.1613年) の聖なるモスク²⁹⁾。

前述の、聖なるモスクのミナレットといくつかのドーム、および講堂、モスクの門は、完全に崩壊し、モスクの外部にある木製の、庇 (sundurma) と表現される上部が瓦 (kiremit) の礼拝場所もまた壊れ、イスラーム学院のいくつかの部屋と泉 (sebil)、およびワクフの廟 (türbe) のいくつかの箇所は破壊され、壊されたので、必要な箇所が発出された勅令 (ferman-ı ali) に従って、取り壊されたのである。

先の白人宦官長 (Ağa-yı Babüssaade) である故ヒュセイン・アーの、イスタンブルにあるタヴク・パザル (Tavuk Pazarı) に近い聖なるモスク³⁰⁾。

神の命 (emr-i hüda) によって、聖なるモスクの天井と壁および、そのミナレットはバルコニーに至るまで完全に破壊され、残った箇所も危険であることから、イスタンブルのカーディーヌ下 (İstanbul Kadısı Efendi)³¹⁾ と建築官長 (Mimar Ağa)³²⁾ に対して、取り壊し調査のために勅令 (emr-i hümayun) が発出されたので、取り壊されたのである。

前述の先の白人宦官長である故ヒュセイン・アーの、キュチュク・アヤ・ソフィア (Küçük Ayasofya) として著名な、聖なるモスク³³⁾。

27) すでに述べたように (Ürekli 2018) では、D.9567の最初の一葉であるここまでを転写し、文書の紹介を唐突に終えている。同史料は一種のリストであるため、そもそも続きがあることを知らなければ、ここで完結する文書であると思いついてしまっても不思議はない。

28) ファーティフ (征服者Fatih) ・モスクとして知られる。コンスタンティノポリスを陥落させ「征服者」の異名をもつメフメト2世 (Mehmed II: d.1481年) によって1470年に建設されたが、1766年のイスタンブル大地震によって完全に倒壊し、後に再建された。Semavi Eyice, "Fatih Camii ve Külliyesi," *DİA*, vol.12, 1995, pp.244-249.

29) エジプト、イエメン、ボスニア、およびブダ (ハンガリー) の州総督を歴任し、後に宰相およびイスタンブル留守居役 (Sadaret Kaymakamı) となった、白人宦官のハドゥム・ハーフズ・アフメト・パシャによって、ヒジュラ暦1004 (1595/96) 年に建設されたモスク。Semavi Eyice, "Hafız Ahmed Paşa Camii ve Külliyesi," *DİA*, vol.15, 1997, pp.85-87.

30) バヤズィット2世期に白人宦官長を務めたキュチュク・ヒュセイン・アー (Küçük Hüseyin Ağa: d.1510年) によって、1500年頃に建設されたと言われるモスク。https://www.mustafacambaz.com/details.php?image_id=33455 (2021年8月15日確認)。また、「鶏市場」を意味するタヴク・パザルは、天蓋付市場 (Kapalıçarşı) に近いヌール・オスマニエ・モスク (Nuruosmaniye Camii) の南側にある広場にあたる。

31) イスタンブルのカーディーヌは、帝都の司法と行政を担った高位の官職である。大城壁内部の「狭義のイスタンブル」だけでなく、金角湾北岸のガラタ (Galata)、アジア側のウスキュダル (Üsküdar)、および大城壁西側のエユップ (Eyüp) を治める各カーディーヌたちの首座として民政を所管した。Necdet Sakaoğlu, "İstanbul Kadılığı," *DBİA*, vol.4, 1994, pp.226-228.

32) 帝室建築官長 (Hassa Mimar Başu/Ser Mimararı Hassa) と呼ばれる、建設行政における総責任者。16世紀に活躍したミマール・スイナン (Mimar Sinan: d.1588年) が著名である。

33) 元来は、ユスティニアヌス1世 (Justinianus I: d.565年) が建設させた聖セルギオスとパコス (Hag. Sergios kai Bakchos) 教会を母体とする。前述のキュチュク・ヒュセイン・アーによって、1507

聖なるモスクの大ドームにおいて、いくつかの漆喰が剥落し、ドームの周囲にあるガラス（の明り取り）は左右ともに破損して修理の必要があり、またイスラーム神秘主義者たち（fukara）が居住する各房には、いくつかのひび割れが出現し、それぞれの炉のいくつかは完全に崩壊、あるいは、いくつかは半壊して、一方で廟において、他方では厠（memşa）において、一部の壁が崩落したのである。

イスタンブルにある、バフチェ・カプ門（Bağçekapısı）³⁴⁾の近くにある、故ホジャ・バシヤ（Hoca Paşa）の聖なるモスク³⁵⁾と、エミール・ブハーリー（の修道場tekke）³⁶⁾。

バフチェ・カプ門の近くにある、聖なるモスクの周辺において、またその外部において、いくつかの箇所を修復が必要である。

また、前述のモスクのミナレットについても、修理が必要である。

エミール・ブハーリー修道場にある聖なる礼拝所（mescid）の、ミフラブの右側の壁は、新たに（造られることが必要であり）、また左側の壁は、修理が必要である。

前述の礼拝所の、6つの天窗のガラスが新たに（造られることが必要であり）、また他のガラスについては修理が必要である。

また、前述の礼拝所のミナレットは、新築されることが必要である。

また、前述の礼拝所の周囲の漆喰は、新たに（塗り）なおされることが必要である。

聖なるモスク³⁷⁾の周囲にある、2つのドームの間に渡された板を支える柱は、新築されるこ

年頃にモスクに転用されたと考えられる（澤井2019：55）。

- 34) 金角湾口の南岸を取り巻く海側の城壁に開かれた門のひとつで、17世紀後半に建設されたエジプト市場（Mısır Çarşısı）の東側にあった。しかし、同じ街区が火元となった1865年のホジャ・バシヤ大火（Hocapaşa Yangını）後の復興に際して、道幅拡張のために撤去された。
- 35) 15世紀後半のモスクとされる。ホジャ・バシヤのホジャは「師」、バシヤは高官に用いる称号であるため、この異名が誰を指すかについては議論がある。自然災害によって何度も被害を受け、修復、改築されて現存する。Emine Naza, “Hocapaşa Camii,” *DBİA*, vol.4, 1994, pp.81f.
- 36) エミール・ブハーリー（Emir Buhari: d.1516年）は、中央アジアのブハラ出身で、有力なイスラーム神秘主義教団のナクシュバンディー教団（Nakşibendiyye）に属した人物。後に、イスタンブルに移住したため、この場所にはバヤズィト2世によって彼の名を冠した同教団の修道場が建設された。M.Baha Batman, “Emir Buhari Tekkesi,” *DİA*, vol.11, 1995, pp.126-128.
- 37) ここまでの箇所は、「エミール・ブハーリー修道場に付属する礼拝所」についての説明であるため、この「聖なるモスク」は、明らかに別のモスクを指すと考えられる。固有名詞は欠落しているものの、D.9567の記述内容からは、少なくとも学校、帝室救貧施設（および、そのパン工房と食料庫）、病院、公衆浴場を擁する大規模なモスク複合施設群（külliye）であることが理解される。こうした一連の設備をすべて備えるモスク複合施設群としては、メフメト2世によるファーティフ・モスク複合施設群、スレイマン1世によるスレイマニエ・モスク複合施設群、スレイマン1世の息子であるセリム2世（Selim II: d.1574年）の妻、ヌールバーヌー（Nurbanu: d.1583年）によって1579年にアジア側のウスキュダルに建設されたアティーク・ヴァーリデ・モスク複合施設群（Atik Valide Camii ve Külliyesi）、およびアフメト1世（Ahmed I: d.1617年）によるスルタン・アフメト・モスク複合施設群がイスタンブルに存在する。しかし、D.9567は白人宦官長が所管した施設の被害リストであると考えられること、および史料中に「病院の近くにある公衆浴場」という一文が存在することから、アティーク・ヴァーリデ・モスク複合施設群を指す可能性が高いと考えられる。同モスク複合施設群については、M.Baha Tanman, “Atik Valide Sultan Külliyesi,” *DİA*, vol.4, 1991, pp.68-73.を参照。

とが必要であり、2つのドームもまた、修理が必要である。また、聖なるモスクの諸ドームにある窓ガラスは、修理が必要であり、崩壊した大窓は地面に置かれ、聖なるミンバル（minber 説教壇）は、取り除かれて新造されることが必要。さらに、ミナレットの先端とバルコニーとの間の箇所（petek gövdesi）と、中庭の門、および他の諸門も修理が必要。加えて、レンガ造りの厠も新築されることが必要。

また、聖なる学校の周囲の壁と、割れた箇所の修理が必要。

また、帝室救貧施設にある2番目の扉の上部のひび割れた箇所は修理が必要で、薪用の門の破壊された天井と薪が置かれる扉は、新築されることが必要。また、帝室救貧施設の2つの（建物の）間で、崩壊して傾いた2つのドームは、新築されることが必要。また、パン工房（ekmekhane）の上に崩落した門柱灯（kapı fener）と、食料庫（kılar）の近くにあるレンガ造りの建物およびその漆喰は修理が、さらに2つの扉の間で崩壊したレンガの壁も修理が必要である。

病院（darüşşifa）にある食料庫と13室のレンガ造りの部屋の割れ目が埋められ、その漆喰や必要なガラスが修理され、前述の病院の近くにある公衆浴場（hamam）の傷が埋められて、さらにその漆喰とガラスの箇所にはレンガを設置して、いくつかの壁は修理が必要。

ホジャ・パシャ（・モスク）の近くにある、先の白人宦官長カユシュ・ムスタファ・アー（Kayış Mustafa Ağa; d.1596年）のイスラーム学院³⁸⁾。

前述のイスラーム学院の周りがある、内廊下の16のドームが崩壊して傾き、ひとつの部屋のドームも崩落したので、（合計で）17のドームが新築されることが必要である。

先の白人宦官長である故スイナン・アー（Sinan Ağa）の、イスタンブルのイブラヒム・パシャの塔（kule-i İbrahim Paşa）³⁹⁾に隣接する、ペイクハーネ（Peykhane）⁴⁰⁾の側にある聖なる礼拝所⁴¹⁾。

聖なる礼拝所の、周囲の埋め込み壁（dolma duvarları）が完全に崩壊し、上部の天井も壊れて、そのミナレットもまた崩落したので、新築されなければ使用不能である。

38) 1591年に、ボスニア出身の白人宦官長であったカユシュ・ムスタファ・アーによって建設されたイスラーム学院。共和国期に入った1938年に、収税局の庁舎建設のために取り壊された。Mübahat Kütükoğlu, *XX. Asıra Erişen İstanbul Medreseleri, Ankara*, 2000, pp.50-52.

39) トプカプ宮殿に近く、多くの行事や祝祭の舞台となった「馬の広場」(At Meydanıヒポドローム)に面して建ち、スレイマン1世の近臣で大宰相となったパルガル・ダーマト・イブラヒム・パシャ(Pargalı Damat İbrahim Paşa; d.1536年)の邸宅(saray)にあった塔(kule)を指すと考えられる。Semavi Eyice, "İbrahim Paşa Sarayı," *DİA*, vol.21, 2000, pp.345-347.

40) オスマン朝のペイク(peyk)は、宮廷において飛脚や儀仗兵の役割を果たす者であり、ペイクハーネは彼らの官舎であった。Zeynep Tarım Ertuğ, "Peyk," *DİA*, vol.34, 2007, pp.263f.

41) ディーヴァン・ヨル(Dvanyolu)通りのチェムベリルタシ近くにかつて存在した。建設者のスイナン・アーは、タワーシー(去勢された者tavaşi)という綽名からも推察されるように白人宦官であった。その後、廃墟となった礼拝所は、1933年には跡地も競売にかけられて完全に消滅した。Şinasi Akbatu, "İstanbul'un Kaybolan Camilerinden: Sinan Ağa Camii, Tahtaminare Camii," *Vakıflar Dergisi*, no.21, 1990, pp.129-132.

イスタンブルの「馬の広場」(Meydan-ı Esb)にある、フィルズ・アー (Firuz Ağa: d.1512/13年)の聖なるモスク⁴²⁾。

前述のモスクの、ミナレットの先端とバルコニーとの間の箇所が崩壊したので、取り除かれ、新築されることが必要。

また、前述のモスクの周りや、その外部のいくつかの箇所も修理が必要。

故ガーズイー・ムラト・パシャ (Murad Paşa: d.1473年)のイスタンブルのアクサライ (Aksaray)⁴³⁾の側にある聖なるモスク⁴⁴⁾。

聖なるモスクの周囲の漆喰が剥落し、その外部の壁は倒壊したために修理が必要。

また、前述のモスクの廁 (kenef) についても修理が必要。

また、聖なるモスクの外にある大通りのイスラーム学院に隣接する壁は修理が必要。

また、聖なるモスクの近くにある廟の壁は修理が必要。

イスラーム学院の周りがある、いくつかの部屋の漆喰と、必要な箇所は修理が必要。

また、聖なるモスクのミナレットは、(建築の)知識を持つ者たち (ashab-ı vukuf) が監察することが必要。

イズミト (İzmit)⁴⁵⁾にある、故メフメト・ベイ (Mehmed Bey)の聖なるモスク⁴⁶⁾。

聖なるモスクのミナレットの半分は庭園に、半分は聖なるモスクの上に倒壊し、その壁のうち20ズイラー (zira)⁴⁷⁾ほどの箇所が崩壊して、そのミナレットの礎石は残っているものの、

-
- 42) バヤズィト2世の宮廷財庫長 (Başhazinedar)であった白人宦官のフィルズ・アーによってヒジュラ暦896 (1490/91)年に建てられた小規模なモスク。「馬の広場」近くのディーヴァン・ヨル通りに現存する。Semavi Eyice, "Firuz Ağa Camii," *DİA*, vol.13, 1996, pp.135-137.
- 43) イスタンブルの南 (マルマラ海)と北 (金角湾)に位置する港湾同士を結ぶ大通りと、西の大城壁から東のトプカプ宮殿に向かう大通りとが交わる低地にある商業地区。アナトリアのカラマン君侯国に対する勝利の後に、その主邑アクサライ (Aksaray)から移された人々が集住したため、この名が付いたとされる。Doğan Kuban, "Aksaray," *DBİA*, vol. 1993, pp.161-165.
- 44) コンスタンティノポリスの陥落によって幼少期に捕虜となり、オスマン宮廷において成長した後に宰相となった、ビザンツ帝国末期の皇帝一族として知られるパライオロゴス家の血を引くハス・ムラト・パシャ (Has Murad Paşa)によって、ヒジュラ暦876 (1471 / 72)年に建設されたモスク。Zeynep Hatice Kurtbil, "Murad Paşa Külliyesi," *DİA*, vol.31, 2006, pp.191f.
- 45) イスタンブルの東方約85kmに位置し、現在イズミト (İzmit)と呼ばれるこの都市は、古代にはニコメディア (Nikomedia)、オスマン朝期はイズニクミトといわれた。後で詳しく検討するように、D.9567において、この箇所のみがイスタンブルではなくイズミトにあるモスクの被害について記されている点は注目に値する。
- 46) 16世紀後半に、一説によるとミマール・スィナンによってイズミトに建設されたモスク。建設者のメフメト・ベイについての詳細は不明であるが、スレイマン1世の女婿で2度にわたって大宰相を務めたリュステム・パシャ (Rüstem Paşa: d.1561年)の家宰 (kethüda)ともいわれる。先行研究では、1719年の大地震をはじめ、自然災害によって何度も破壊され、そのたびに再建されたことが確認される。とりわけ、火災で全焼した後の1836年には、海軍大提督 (Kaptan-ı Derya)であったアフメト・フェヴズィ・パシャ (Ahmet Fevzi Paşa: d.1841年)によって再建されたため、現在はフェヴズィイェ・モスク (Fevziyye Camii)として知られる。Ahmed Neziḥ Galitekin, *İzmit Mehmed Bey Nam-ı Diğer Fevziye Câmî-i Şerîf*, İstanbul, 2002, pp.30-42.
- 47) ズイラーは、アルシュン (arşun)ともいわれる長さの単位。この場合は、建築に用いられた「建築アルシュン」(Mimar arşunu)を指すと考えられ、約73.3cmに相当する。20ズイラーは、約14m66cmとなる。Mehmet Erkal, "arşun," *DİA*, vol.3, 1991, pp.411-413.

これにも（再利用には）問題がある。

また、モスクの礼拝場所にある、壁の3区画のうち2区画は、基礎に至るまで崩壊していること。

また、ヘルヴァ屋 (helvacılar)⁴⁸⁾ の側にある壁の3区画のうち1区画が崩壊していること。

また、聖なるモスクの漆喰は、一方では建物内部で、他方では外部においても、一部の表面が残されたのみでバラバラに崩落。

また、聖なるモスクの19の磨りガラス (buzlu cam) と塗装ガラス (astarlı cam) のうち4枚のみが修復可能であり、残りのものは新造されることが必要。

また、水盤舎 (şadırvan)⁴⁹⁾ も傾いたために、真っ直ぐにすることが必要。

また、厠も大通り側にある壁が崩壊したので、新築されることが必要。

また、食堂 (tabhane) にある、5つの部屋のうち3つが崩壊したので、新築されることが必要。

3. TSMA D.9567の成立を巡る一考察

以上の記述内容からも明らかなように、日付が記されていないD.9567は、大規模地震によって被災したモスクを中心とする多くの建築物の被害状況を詳細にまとめ上げた文書である。また、すでに述べたように、16世紀末に建設された建物についての記録も複数個所にわたって確認されることから、(Ürekli 2018) の説明にある「スレイマン1世の時代」の文書ではないことも明白である。それでは、D.9567は、どの時代の大地震を受けて作成されたものなのだろうか。本稿の冒頭でも述べたように、17世紀以降のイスタンブルにおいて発生した歴史的大地震としては、1648年、1719年、1766年および1894年のものが知られている。同史料も、このうちのひとつに関わるものである可能性がきわめて高い。

先行研究を渉猟したところ、D.9567に記録された地震が上記いずれのものかという点については、2つの異なる見解が対立していることが明らかとなった。ひとつは、より古くから主張されてきた1648年のイスタンブル大地震に由来するという見方である（以下、「1648年大地震説」と略記）。そして、いまひとつは、比較的最近になって打ち出された1766年のイスタンブル大地震に関わるとするものである（以下、「1766年大地震説」）。まずは、双方の主張の根拠と対立する論点とについて、簡単に整理しておきたい。

確認できる限り、D.9567に最初に言及した研究は (Cezar 1963) である。オスマン朝社会経済史の研究者として知られるムスタファ・ジェザール (Mustafa Cezar) は、オスマン朝期のイスタンブルで頻発した大火をはじめ、地震や洪水など各種の自然災害について総覧した大部な論文を執筆した。同論文において、ジェザールはD.9567を「1648年の大地震に関わる可能性が非常に強く推測される史料」として紹介し、アラビア文字によって書かれた史料のラテン・アルファベット転写を掲載している。そして、この「1648年大地震説」の論拠として、「トプカプ宮殿博物館文書館に置かれたカタログの註記において、同史料が17世紀に属するものとし

48) ヘルヴァは、アラビア語のハルワ (甘い حلوى) に由来し、ゴマ、小麦粉あるいはセモリナ粉などを主原料とする練り菓子。鈴木董『世界の食文化9 トルコ』農文協、2003年、250-254頁。

49) アブデストハーネ (abdesthane) とも呼ばれる水盤舎は、礼拝前の身を清める行為 (アブデスト、あるいはウドゥー) のために、モスクや礼拝所に置かれる水道施設である。

て明記されていること⁵⁰⁾、及び「イスタンブルで発生した数々の地震についての他の歴史記録に書かれた情報を考慮した」ことを挙げている (Cezar 1973: 383-388)。

しかし、カタログの註記は論外であるとしても、ジェザールはこれ以上の具体的な典拠、例えばどのような他の記録に書かれた、いかなる情報に依拠したのかについては、一切示していない。この点において「1648年大地震説」は、その論拠がきわめて薄弱であるとともに、ジェザールの単なる思い込みの域を出ない言説である可能性も否定できない。

このあやふやな「1648年大地震説」を踏襲し、その後の定着に貢献したのが、著名な建築史家であったセマーヴィー・エイジェ (Semavi Eyice) である。彼は例えば、トルコ宗務基金 (Türkiye Diyanet Vakfı) によって刊行された代表的な歴史事典として知られる『イスラーム百科事典』において多くの建築物に関する項目を執筆した際に、D.9567が1648年のイスタンブル大地震に関わる史料であることを、その根拠を示すことなく各所で明言した⁵¹⁾。

一方で、D.9567が1648年のイスタンブル大地震を受けて作成されたとする、ジェザールとエイジェによる「1648年大地震説」に対して、地震研究者であるニコラス・アンブラシース (Nicolas Ambraseys) とオスマン史研究者のキャロライン・フィンケル (Caroline Finkel) は、1995年にイスタンブルで出版された共著において、初めて具体的な反論を行った。トルコとその周辺地域における歴史地震について考察することを目的とした同書において、D.9567は従来いわれてきたような1648年の地震ではなく、その100年以上後の1766年にイスタンブルを襲った大地震に関わる史料とされたのである。

アンブラシースとフィンケルは、この「1766年大地震説」の論拠として、以下の3点を挙げている。すなわち、まず「最も雄弁なもの (根拠) として、史料の紙に入れられた製紙業者の透かしが18世紀半ばまで流通していなかった種類のものであること」⁵²⁾、次に「この史料 (D.9567) に列挙された被害と、1766年5月の大地震に関係する日付入りの、あるいは日付なしの他の諸史料における同一の建築物について記録された被害との比較が、同史料 (D.9567) が1766年に属するという点について、より説得力のある証拠を提供すること」、最後に「地震学的な考察も、このリストを1766年の大地震についてのものとして、あらためて同定することを支持している。すなわち、1648年のもの (地震) はイスタンブルにおいて、これほどまでに深刻な被害を引き起こさなかったのに対して、1766年5月の大地震はあきらかに、そうした

50) 同文書館のカタログのうち出版されたものは、アルファベットのHの途中までである。それ以降については、少なくとも執筆者が同文書館で調査を行った2003年の時点では、古いノートに鉛筆書きで記された判読も困難なものが、閲覧室の片隅に置かれていた。ジェザールが1963年に書いた論文において根拠とした「カタログ」も、おそらくこれであると推察される。

51) 具体的には、(Eyice 1991:65)、(Eyice 1994:94)、(Eyice 1996: 135)、Semavi Eyice, “Kariye Camii,” *DİA*, vol.24, 2001, pp. 495-498.、Semavi Eyice, “Küçük Ayasofya,” *DİA*, vol.26, 2002, pp.520-522. 「アテーク・アリ・パシャ・モスク」の項目のように、「かりに、この史料が1648年の大地震に関連するものでなければ」と、一定の留保を示している箇所もあるものの、他の項目ではD.9567を1648年の大震災についての史料と断定して用いている。

52) しかしアンブラシースとフィンケルは、この直後に「ただし、マーブル紙によって作られた、史料が入れられている封筒 (envelope、正確にはフォルダとすべき) にある「3つの三日月」 (treluna) の透かしは、より古い時代のものであることを示唆している。」とも記している (Ambraseys, Finkel 1995: 144.)。要するに、史料が入れられたフォルダはより古い時代の紙で作られているものの、その中の史料の紙自体は18世紀後半以降のものである、とする主張だろうか。

ものであったから」とする（Ambraseys, Finkel 1995: 144f.）。

以上の3点についての再検証は、後程あらためて行うこととして、その前に、この「1766年大地震説」を継承する、もうひとつの重要な研究にも言及しておきたい。それは、建築史の研究者であるデニズ・マズルーム（Deniz Mazlum）による、1766年のイスタンブル大地震についての、ほとんど唯一の専著であり、またもっとも包括的な研究である⁵³⁾。同書において、マズルームは前述の「1766年大地震説」を支持しつつ、ジェザールやエイジェによる「1648年大地震説」を明確に否定した。そして、それに留まらず、次の点もD.9567が1766年の大地震を受けて作成された史料であるとする根拠に付け加えた。

すなわち、「(1766年の大地震後に行われたダウト・パシャ・モスク複合施設群を含む被害調査の記録であり、同年8月6日の日付を有する) TSMA D.8568の番号を持つ史料に示された様々な被害と、この(つまりD.9567の) 調査結果とにおける唯一の相違点は、(同モスク複合施設群の) 廟が被害を受けた建物の中に含まれていないことである」。ただし、「(やはり1766年の大地震後に行われた被害調査の記録であり、同年9月4日の日付を有する) TSMA E.1784の番号をもつ史料においても、この場合にはイスラーム学院の名が(被災した建物として) 記録されておらず、この種の抜け落ちは普通のこととして受け入れることが必要であることを(我々に) 考えさせるものである」とする。つまり、マズルームは、日付をもたないD.9567と1766年の日付を有するD.8568とを比較すると、ダウト・パシャ・モスク複合施設群の被害についての記録が、廟を除けば一致しているため、そして、この程度の抜け落ちは「普通のこと」であるため、D.9567もまた1766年のイスタンブル大地震を受けて作成された、と主張するのである（Mazlum 2011: 132f.）。

以上のように「1766年大地震説」は、少なくとも旧来の「1648年大地震説」に比べると、その論拠となる具体的な史料を提示している。そこで、以下においては、これらを逐一あらためて確認することによって、「1766年大地震説」の妥当性について検証していきたい。

まず、史料の紙にある透かしが、18世紀中頃以降になって流通し始めたものだとする主張についてである。透かしを用いた年代比定は、とりわけ文書学的には、一見、非常に興味深く、また魅力的な手法であるように感じられるかもしれない。しかし残念ながら、オスマン朝における透かしについての研究は質量ともに非常に限定的であり、少なくとも透かし自体を根拠として、その史料の作成年代を確定できる水準に達しているとはいえない。また、ある時代に作成された記録が、それ以前の時代に製造された紙の上に記された可能性も排除できない。実際、（Ambraseys, Finkel 1995）においても、透かしの形状や、そこから推測される製紙業者、あるいは生産地などを挙げての具体的な検討は、まったく行われていない。

次に、D.9567に列挙された被害と、1766年の大地震に関係する日付入りの他の諸史料における同一の建築物について記録された被害とを比較した結果、D.9567を1766年の大地震と関連付けた、とする論拠について見てみたい。（Ambraseys, Finkel 1995）において、D.9567との比較対象として具体的な史料名が挙げられているのは、いずれもトプカプ宮殿博物館文書館に所

53) Deniz Mazlum, *1766 İstanbul Depremi: Belgeler Işığında Yapı Onarımları*, İstanbul, 2011.なお、同書の詳細については、執筆者による書評を参照。澤井一彰「(書評) デニズ・マズルーム『1766年イスタンブル地震—史料による建造物修復—』」、近藤信彰(編)『近世イスラーム国家史研究の現在』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2015年、391-396頁。

蔵されているD.6322、D.10129、E.8219およびE.1784の4点である。しかし、そのうち1766年の大地震に関連する日付を有する史料はD.6322とE.1784のみであり、他の2つはD.9567と同様に日付をもたないため、そもそも作成年代を確定させるための比較対象として適当ではない。1766年の日付をもつD.6322とE.1784は、ともに同年のイスタンブル大地震で被災した建物の復旧についての記録であり、内容も重複することから、ここでは後の別の議論ともかかわるダウト・パシャ・モスク複合施設群について記されたD.6322の関連箇所である冒頭部分を訳出するとともに、上述のD.9567に書かれたダウト・パシャ・モスク複合施設群についての被害の記録を比較してみたい。

故ガーズイー・ダウト・パシャのイスタンブルにある聖なるモスクと、素晴らしきイスラーム学院、至高の学校と帝室救貧施設の、発生した大地震によって被災した箇所および、新たに木造で建設されたミフラブのドーム、外部にある2つのドーム、講堂のドーム、ムアズズィン⁵⁴⁾の部屋、新築されたミナレットとメッキされたその先端部、敷き詰められた鉛板、そして必要に応じた彩色用塗料とシャンデリア、その他の支出台帳であり、明細の方法によって述べられる。1766年8月24日から1767年5月29日まで⁵⁵⁾。

この記述から理解されるダウト・パシャ・モスク複合施設群の損傷箇所は、すでに示したD.9567の記録とは、一見して明らかに大きく異なるものである。具体的には、D.9567に記載された「ワクフ管財人の部屋」や「食堂」など、修復が必要とされた複数の箇所についてD.6322では一切触れられていない一方、D.9567には見られない「ムアズズィンの部屋」についての言及が確認できる。さらには、おそらくは被害の程度が軽かったため、D.9567では「修理が必要」と記されるに留まっていたミナレットが、D.6322においては「新築された」と明記されている。D.9567においても、フィルズ・アー・モスクのように被害が大きな例については、「ミナレットの先端とバルコニーとの間の箇所が崩壊したので、取り除かれ、新築されることが必要」と明言されていることから、こうした地震後の被災調査においては、修理だけで十分な場合と、新築される必要がある場合とでは、記録上もはっきりと書き分けられていたことが推測される。以上の諸点からも、D.9567が1766年の大地震を受けて作成されたと断定する「1766年大地震説」には、疑問を抱かざるを得ない。

3つ目の根拠である、過去の地震の規模については、最新の地震学や地質学の研究手法を用いたとしても、特定の歴史地震の規模を精確に算定することは容易ではないという事実を前提としつつ、かりに史料に依拠して、こうした主張がなされていると推察した場合には、より大きな問題が立ち現れてくる。それは、1766年のイスタンブル大地震に対する過大評価の問題である。具体的には、同地震の最も本格的な研究とされてきたマズルームの著作において、リスト化されて列挙された同地震によって被災した104の建築物のうち、全体の実に約12.5%に相当する13件については、そのうち9件がD.9567のみに、また3件はD.9567と、すでに言及した

54) ムアズズィン (muezzin) は、礼拝の呼びかけであるアザーンを唱える者。

55) D.6322については、マズルームによる著書の巻末に付された補遺を参照した (Mazlum 2011: 240-244)。また、これ以降の記述内容は、修復に必要な材木 (kereste) の種類とその価格についてのリストであり、本稿における議論とは直接関係しないために割愛した。

日付が記されていないD.10129に、そして最後の1件についてはD.9567と、やはり日付が不明なE.8219とに依拠したものであったことが、今回あらためて判明した（Mazlum 2011: 52-56）。すなわち、かりにD.9567が別の地震の記録であることが明らかとなった際には、実際に1766年の大地震によって被災した建物の数は大幅に減少することになり、それによって同地震に対する従来の歴史的評価もまた、その過大な見積もりを修正する必要に迫られるのである。

最後に、マズルーム自身によって追加された論拠についても、検証しておきたい。すなわち、日付をもたないD.9567と1766年の日付を有するD.8568とを比較した際に、ダウト・パシャ・モスク複合施設群の被害についての記録が、廟を除けば同一であるため、D.9567もまた1766年のイスタンブル大地震を受けて作成された、とする見解についてである。

ここで用いられているD.8568は、1766年8月6日付で当時の帝室建築官長メフメト・ターヒル（Mehmed Tahir）の署名入りで作成され、1766年のイスタンブル大地震によって被災したダウト・パシャ・モスク複合施設群の修復箇所と方法、およびそれに伴う支出額について記された、非常に詳細な史料である⁵⁶⁾。同史料に記された133箇所及ぶ修復、あるいは部分的な新築箇所の総額は、184万5511アクチェ⁵⁷⁾にのぼる。

ただし、その内訳をみると、支出の大半は新築されるミナレットのために費やされており、この点は前述の1766年付の史料であるD.6322の記述内容との整合性が確認される一方で、単に「ミナレットは修理が必要」とのみ記されたD.9567とは齟齬がみられるものとなっている。他方で、すでにマズルームも指摘したように、D.9567に全く記載のない廟の修復についてはD.8568において、廟の白漆喰、ガラス、およびドームのアーチと鉛葺きのアーチ、の3項目にわたって合計1万1070アクチェが経費として計上されている。さらに、D.8568は、同じ時期に、類似の目的で作成されたと考えられるD.6322と比較しても非常に詳細な修復の工程を記した文書であるにもかかわらず、D.9567で言及されている「ワクフ管財人の部屋」や「食堂」については一切記されていない。以上の諸点を踏まえると、D.8568とD.9567の記述内容が廟を除けば一致するというマズルームの主張は容易に受け入れ難く、D.9567がD.8568と同様に1766年のイスタンブル大地震を受けて作成された史料であるとする根拠も、やはり薄弱なものではないかと考えられるのである。

それでは、かりにD.9567が1648年の大地震のものでも、また1766年の大地震によるものでもないとするならば、同文書はいかなる地震を受けて作成された史料なのだろうか。以下では、従来の2つの主張とは異なる仮説を提示して、本稿を締めくくりにしたい。

D.9567の成立年代を確定させる際に最も注目すべき記述は、その末尾に記された、イズミトにあるメフメト・ベイ・モスクについてのものであると考えられる。このモスクは、従来のD.9567を巡る議論においては、まったく注目されてこなかった⁵⁸⁾。おそらく、メフメト・ベイ・モス

56) D.8468も、マズルームの著書における補遺を参照した（Mazlum 2011: 235-240）。

57) アクチェ（akçe）は、オスマン朝における基軸通貨であった小型銀貨。17世紀末以降、新たに発行された大型銀貨であるクルシュ（kuruş/guruş）に徐々に置き換わっていった。同史料においても、1クルシュが120アクチェとする公定相場に基づく換算額が確認できる。

58) ただしアンブラシースとフィンケルは、その「1766年大地震説」に基づきつつ、同地震についての解説において「メフメト・ベイ・モスクのドームが崩壊する原因となった」とごく簡単には触れている（Ambraseys, Finkel 1995: 143）。しかし、訳出した史料の関係箇所を一瞥すれば分かるように、この地震でメフメト・ベイ・モスクは全壊に近い大損害を被っている。

クが、イスタンブルではなく、イズミトという地方都市に存在する比較的小規模な建築物であったことが、現在までの等閑視につながったのではないかと推測される。

すでに述べたように、16世紀後半にミマール・スイナンによって建築されたと伝えられるイズミトのメフメト・ベイ・モスクは、地震や火災によって何度も破壊され、先行研究によって判明しているだけでも、現在に至るまでに5度にわたって再建や修復が繰り返されてきた。そして、このモスクが最初に被災することになった災害は、イズミトだけでなくイスタンブルにも大きな被害をもたらした、1719年の大地震であった (Galitekin 2002: 32)。

1719年5月24日に発生したこの大地震は、従来の「1648年大地震説」と「1766年大地震説」との間であって、D.9567を巡る議論においては、これまで一切言及されてこなかった。しかし、冒頭でも触れたように1719年の大地震は、オスマン朝期のイスタンブルで発生した「四大地震」のひとつとされるほど大規模なものであり (Sakin 2002: 41-67)、個別の地震としては、ジェザールも、またアンブラシースとフィンケルも、各々の研究において大きく取り上げてきたものである (Cezar 1963: 388f.)、(Ambraseys, Finkel 1995: 104-108)。

加えて、オスマン朝期に書かれた地震についての最古の专著とされる『地震小冊』(Risale-i Zelzele) は、この1719年のイスタンブル大地震の後に、民衆の間で広まった「風聞」を否定し、イスラームの伝統的な地震観に基づく「正しい知識」を知らしめるために時の君主アフメト3世 (d.1736年) に献呈すべく執筆された。さらに、著者のアフメト・ビン・レジェブ・コスタンティニー (Ahmed bin Receb Kostantini: d.1727年) は、この地震によって大きな被害を受けたと考えられ、D.9567の冒頭にも記載があるアティーク・アリ・パシャ・モスクに付属するイスラーム学院の教授職を務めたことでも知られている⁵⁹⁾。これらの点からも、1719年の大地震が物理的にはもちろん、社会的にも大きな影響を及ぼした災害であったことは間違いなく、この地震がD.9567が作成される要因となった可能性は十分に考えられる。

しかし、D.9567が1719年のイスタンブル大地震後の復興のために作成されたと推定される最大の根拠は、1719年に記された別系統の一次史料によって、同年に発生した地震に際して、このメフメト・ベイ・モスクが罹災したことが明確に確認できるという事実である。以下に示した、ヒジュラ暦1131年ラマダーン月下旬 (1719年8月上旬) の日付をもつ、異議申立台帳 (Şikayet Defterleri) に記録された命令の写しの関連箇所を見てみたい⁶⁰⁾。

イズミトにおける、故メフメト・ベイの諸ワクフのワクフ管財人であるムスタファ (Mustafa) に、以下のように命じる。(1719年に) 発生した大地震によって、前述の者のワクフの、イズミトの町に建設されたモスクの屋根と四方にある壁、水盤舎と足洗い場、およびこれに属するオルタ・ハمام (Orta Hamam) として知られる公衆浴場と風呂焚窯

59) Lemi Akın, “İlk Müstakil Deprem Kitabı: Risale-i Zelzele,” *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi*, 44 (44), 2012, pp.1-81.

60) 異議申立台帳は、旧異議申立台帳 (Atik Şikayet Defterleri) とも呼ばれ、1649年以降の台帳が、大統領府オスマン文書館に収蔵されている。Necatî Aktaş, “Atik Şikayet Defteri,” *DİA*, vol.41991, p.68.、A.DVNS.ŞKT.d no.89 p.58. 今回は実物を見ることができなかつたため、オスマン朝期におけるアナトリア各地の様々なモスクについての修復活動についての史料を集めたエルドアンの論文所収の当該史料を参照した。Muzaffer Erdoğan, “Osmanlı Devrinde Anadolu Camilerinde Restorasyon Faaliyetleri,” *Vakıflar Dergisi*, no.7, 1968, pp.149-205.

(külhan) が完全に崩壊したことから、修復がなされることが重要であり（後略）⁶¹⁾

地震発生から約2か月半後に記述されたこの史料に明記されているように、メフメト・ベイ・モスクは、1719年の大地震によって完全に崩壊したことが理解される。また、被災状況についても公衆浴場への言及の有無を除けば、D.9567の記録と概ね一致する。他方で、メフメト・ベイ・モスクも含めて、1648年や1766年に発生した地震によるイズミトにおける大きな被害は、これまでの研究では確認されていない⁶²⁾。以上のことから、D.9567は先行研究において対立する2つの見解である「1648年大地震説」でも「1766年大地震説」でもなく、1719年のイスタンブル大地震を受けて作成されたものであると考えられるのである。

おわりに

ここまでの考察によっても明らかなように、本稿の目的は、先行研究において「1648年大地震説」と「1766年大地震説」とが対立してきたトプカプ宮殿博物館文書館所蔵のD.9567の成立の経緯について、そのいずれでもない、1719年のイスタンブル大地震によるものである可能性がきわめて高いとする新たな見解を示すことにあった。そして、仮に「1719年大地震説」ともいべきこの仮説が正しいとするならば、1766年のイスタンブル大地震はマズルームの研究によって主張されてきたほどの損害をもたらさなかったということになり、他方で1719年の大地震の被害は、従来考えられていたよりも、かなりの程度大きいものであったということになる。ただし、以下でいくつかの留保を行うように「1719年大地震説」にも、まったく問題が残されていないわけではない。

まず、マズルームが比較したD.8568には記載のあったダウト・パシャ・モスク複合施設群の廟についての被害がD.9567には一切記されていないことは、すでに指摘したとおりである。同様に、本稿で新たに提示した「1719年大地震説」にもまた、比較の対象とした1719年の日付をもつ異議申立台帳には明記されているメフメト・ベイ・モスクに付属する公衆浴場についての被災記録がD.9567には見られないという懸念が存在する。また、現在のところ発見されていない1766年の大地震によるメフメト・ベイ・モスクの被害を記した何らかの史料が今後、新たに見つかるという可能性も完全には否定できない。

これらの点において、本稿における「1719年大地震説」は、イスタンブルにある大統領府オスマン文書館をはじめとして、現地における史料調査を行い得ないという限定的な状況の中で提示した仮説であり、そこには一定の限界が存在していることを付記しておく必要もあろう。

61) 紙幅の制限から訳出することはできないが、同じ台帳におけるヒジュラ暦1131年シャーバン月中旬（1719年7月上旬）の日付を有する別の命令の写しにおいても、メフメト・ベイ・モスクの修復についての言及が見られる（Erdoğan 1968: 185f.）。

62) 例えば、多数の年代記の記述を用いてイスタンブルと周辺地域における歴史地震について包括的な研究を行ったサーキンは、イズミトの郷土史家であるオズトゥレが、典拠となる史料を示すことなく、1766年の大地震においてメフメト・ベイ・モスクのドームが崩壊した他、都市にも大きな被害が生じたと主張したのに対して、おそらく1719年の大地震の被害と混同している可能性が高いとし、慎重に扱う必要があると指摘している。Avni Öztüre, *Nikomedia Yöresindeki Yeni Bulgularla İzmit Tarihi*, İstanbul, 1981, p.109.および (Sakin 2002: 53)。

しかしながら、コロナ禍のただ中において行動が制限されているという条件下ではあるものの、少なくとも先行研究によって対立してきた2つの見解、具体的には史料的根拠がまったく示されていない曖昧模糊とした「1648年大地震説」と、論拠となる複数の史料が一応は明示されているものの、それらを逐一精査した際に、そのいずれにおいても小さくない矛盾があらためて明らかとなった「1766年大地震説」とに比べると、より蓋然性の高い仮説として、新たに「1719年大地震説」を提示することができたのではないかと思料する次第である。

残された課題については、2年近くに及んでいるコロナ禍によって世界中が混乱を続ける現在の状況が落ち着き、再び大統領府オスマン文書館を訪れることができるようになれば、その際にあらためて本稿の欠を埋める努力を行うこととする。そして近い将来、それが実現することを切に願いつつ、ここでひとまず擱筆することにした。